東西エコミュージアム見聞記

エコミュージアムとは

「エコミュージアム」とは、エコロジーとミュージアムを結びつけた造語です。日本語では「生活・環境博物館」と訳されるようです。一九六〇年代にフランスで提唱された新しい博物館の考え方で、地域の自然と人間のかかわりを探る新しい博物館のシステムのことを言います。

少し詳しくいうと「地域の自然環境、社会環境・地域住民の生活の発展過程を歴史的に探求し、地域の営みから生まれた遺産（資源）を現地で保存・育成・展示することを通じて地域社会の発展に寄与すること」を目的とし、「エコミュージアムは、行政と住民が一体となって発想し、形成し、運営する。行政は、資金、資材、施設、技術等を用意し、地域住民はアイディア、知恵、情熱、ビジョン等を提供する形で両者が運営に参加すること」を理念としています（引用は山形県朝日町のホームページによる）。

しかしながら、日頃あまり博物館に足を運ばない人にとって「博物館」は重々しい建物で、中には恐竜の骨とか縄文人の生活などが展示してあり、どちらかというと入場者が少ない施設というようなイメージがあります。エコミュージアムとはそういったものではなく、そこに在る地域の自然の森や川などの自然環境や昔からの生活風習などの地域の文化をPRするものであるといえそうです。施設としては大きな「ハコモノ」の大展示室は存在せず、「コア」と呼ばれる中心施設とその周りにポイントとなる「サテライト」という施設や場所が存在します。なお、施設の整備には農林水産省の補助事業である*「田園空間整備事業」を利用していることが多いようです。また、展示物は他から新しいものを持ち込むというのではなく、すでに在るものを保全するという考え方です。

エリアに関しては、複数の市町村をまたぐ広域で行う場合や市長村の特定一地区で行う場合など様々です。そのため、行政と住民が役割分担し共同運営で進めていくことが望ましく、それが目指している方向でもあるのです。運営の事務局となるNPOが存在するところもあります。目的は観光でお金を稼ぐことではなく、「生活するものの満足」のために行うもので、住民の「心おこし」を目標としています。エコミュージアムを実施した結果、宮崎県綾町のように観光事業に成果があがっているという報告も出てきています。

ただ、問題点もあります。たとえば、施設看板などのハード面の充実にばかり目が向けられて、ソフト面が不十分になりやすいということなどです。

ここでは山形県朝日町や滋賀県甲西町の取材を通じて、エコミュージアムの良さや運営の難しさなどを少しでも明らかにしていきたいと思います。

山形県朝日町エコミュージアムについて

山形県朝日町は山形県中央部に位置し、磐梯朝日国立公園の朝日連峰にいだかれた、自然豊かな町です。人口一万人弱ですが、品質日本一といわれるリンゴの生産やワインの生産などが盛んです。ここでは空気を大切にしようということで、

＊田園空間整備事業とは

農村がもつ自然・伝統文化など、日本人の原風景を形成してきた多面的機能を再評価し、都市との共生をめざした美しく豊かな田園空間づくりを目的とします。中心施設として田園空間博物館（コア施設）を整備、そのまわりに存在する農業における美しい景観、伝統的建築物、史跡など（サテライト）の整備、それらと田園空間博物館を結ぶ散策道、旧街道など（フットパス）の整備など、田園におけるエコミュージアムをハード面でサポートする事業です。ちなみに滋賀県は全国一この事業を活用しています。

朝日連峰

住民の七割がお金を出して「空気神社」という神社を建立したり、さらに、昔から山のブナ林の伐採に反対した人がいたなど、地域の環境に対しては昔から住民の多くが高い意識をもっていたという土壌がありました。

そして日本で初めてエコミュージアムの概念を導入した自治体でもあるのです。この朝日町にエコミュージアムを紹介したのは、当地で旅館を営む西沢信雄さん（自然保護活動家。滋賀県大津市出身、現在、朝日町町議）です。

平成元年十月に「エコミュージアム研究会」が設立されたあと、シンポジウムの開催、フランスへの研修団派遣、国際会議開催等を経て、平成十二年六月にエコミュージアム・コアセンター「創遊館」が完成しました。その他、中心となる組織づくり、イベントによる広報、シンボルとなる施設づくりが着々と進められてきています。ここのシステムは、コア（中心施設）として創遊館（役場の隣にある生涯学習センターのような施設で、NPOの事務局がある）が存在し、周辺の集落等に「サテライト」というポイントを置きます。そこには「サイン」というポイントを明示する看板等があり、そのサテライトを説明できる「案内人」が存在するというものです。

コア施設である創遊館ができたことが、町民へのPR活動となりました。ここは町民の交流施設であり、みんなが「学ぶ」場所なのです。先日も早稲田大学の日本語教育研究センターの外国人学生二十五人が「エコミュージアム紀行」と題して朝日町を訪れ、サテライトで案内人の人たちの説明を受けました。そして二泊三日のプログラムの中で朝日町の豊かな自然、その中に息づく知恵、技、文化、歴史を知り、そして豊かな人情は、留学生たちに大きな感動と心に残る思い出を与えたようでした。

創遊館

ただ、これまでの行政施策のように施設（ハコ）はつくったものの、その後の住民に対するアプローチがないせいで、そっぽを向かれたりしては大変です。ただでさえわかりにくいシステムを住民に理解してもらい、共に実施していかなければならないのです。また、地域資源の掘り起こし作業も住民だけでは難しい仕事です。サポートする人材が行政にも住民の側にも必要です。朝日町では、これを実施するためにNPOである「朝日町エコミュージアム協会」を平成十一年に設立しました。本年度より若手理事の安藤竜二氏が理事長に、地元JAを退職した菅井正人氏が事務局長に就任し、地元集落を回り資源調査に乗り出しています。

朝日町エコミュージアム協会事務局（創遊館内）

このような取り組みを続ける朝日町は、全国でもっともエコミュージアムのソフト面で進んだ町といわれています。

甲西エコミュージアムについて

続いて滋賀県において、エコミュージアムを熱心に運営している甲西町で、事務局の役場企画課にお話を聞かせていただきました。

甲西町は滋賀県の南部、甲賀郡にあり人口四万三千人（平成十四年十一月現在）、湖南工業団地をはじめ国道1号線沿いに多くの事業所があり、JR草津線沿いには住宅が増え京阪神のベッドタウンとなっています。古くから住んでいる人より、新しく引っ越してきた人のほうが多くなっています。そういう面では、山形県朝日町とは大きく事情が異なります。また、町の中心的な象徴となるものが明確でなく、古くからの住人の割合が少なくなったことなどから、甲西町としての新たなアイデンティティーの確立が求められているといえます。

甲西町は「日本一住みごたえ」のある町を目指しています。そして、それをエコミュージアムの理念と手法により実現しようと考えています。甲西町の人々が、「地域資源」をどうとらえるかが、甲西エコミュージアムを語る時のカギとなると思います。

甲西町にとって「地域資源」とは何でしょう。「地域資源」とは、そこに「在るもの」です。よ

そから導入するものではありません。そうかといって、古くからの伝統行事や生活様式、建造物だけに限定されるものでもありません。甲西町は、新興住宅に住む人のほうが多くなった町です。これらの地区では伝統は在るものではなく、どうやら創り出すものであるといえます。一つの例ですが、甲西町には芸術に志を持つ人々が多く住む地域があり、毎年春コバノミツバツツジの花が咲く頃に、この地域の女性グループがそれぞれのお宅や創作活動の場を開放しています。書・画・器・染・織などの多くの芸術作品を展示したり、音楽会や茶話会も催されています。地域の人々をはじめ、その行事を伝え聞いた他の地域の人々が、春の一日、一緒になって思い思いに町を巡って各館の作品を鑑賞したり、会話や町歩きを楽しんでいます。昨年から、男性グループが同様な趣旨とかたちで秋に作品展を開くようになっています。エコミュージアムは地域がまるごと博物館でもあり、かつ、まるごと美術館ととらえることもできるのです。

このような甲西エコミュージアムの特徴は、先にハード面を整えないことです。シンボルを造って多くの人にPRするということも大切ですが、長期的な計画に位置づけて地道に取り組みながら、エコミュージアムの理念と手法を住民自身のものにしてもらい、地域に根ざしたかたちで発展させていくというのは、まさにまちづくりの王道といえるものだと思います。ハード面がないかわりにソフト面には力を入れています。それが、役場の広報とは別に『甲西町エコミュージアム通信』発行になり、住民への啓発やPRといった関係者の意気込みを感じる取り組みにつながっているのです。

まとめ

エコミュージアムは、厳密には観光資源ともいえないし環境保全活動でもありません。地域の宝となるものを掘り起こし、記録し、輝くように磨き上げることが重要といえます。しかし、地元の住民にとっては、すぐ生活のためになることを考えてしまったり、地元のしがらみがあって活動に支障をきたすことが多いと思います。

また、市町村行政というのは、今まで国や県から補助金を引き出し、ハード面を充実させる仕事が多く、ソフト面を充実させることは苦手でした。これまでの慣行上、住民側もお金を期待したりして、すぐに地域が潤わない町役場の企画には抵抗も多かったはずです。

エコミュージアムの目的は「自然や文化遺産を保全していくことであり、かつ自然と文化を活かした産業を育成することだ」と朝日町の広報資料にありました。まず初期の段階で住民の心にしっかりとした意識づけや納得がないと、画に描いた餅のようになってしまい、中途半端な生涯学習、観光ガイド、産業振興となる危険性をはらむことになります。それでは今までのいろいろな試みとどう違うのかわからないといわれそうです。

今回の取材を通じてもっとも印象的だったのは、山形県朝日町役場の方が、「実は、滋賀県の琵琶湖博物館のように、地域文化を丹念に掘り起こし、工夫して展示し多くの人々の目にふれるようにするという理想的な仕事がしてみたいですね」と取材の終わりにおっしゃられたことです。遠方まできて滋賀県の話になり、なんとなく恥ずかしいような、おもはゆいような気分になりました。

知ってますか?ヨシのこと

ヨシの活用法開発に期待をかける

西川 嘉廣
（ヨシ博物館 館長）

筆者は本誌前号において、「ヨシとはどんな植物か」「歴史」「琵琶湖とヨシ」「ヨシの機能」にふれ、最後に「目下、最大の課題は、なんといっても刈り取ったヨシの活用法の新規開発です。伝統的用途に替わる、大量需要が見込める付加価値の高いヨシ製品の開発こそが現下の急務なのです」と記しました。

豊かなヨシ原を維持するためには、またヨシの水質浄化機能のためにも、厳冬期のヨシの刈り取り作業を年々歳々繰り返さなければなりません。これまで長い間、ヨシ刈りは農閑期の副業として〈刈り子さん〉と呼ばれる人々によって行われてきましたが、農業形態の変化やヨシ需要の激減のせいで、後継者難に直面しています。

一方では、最近の報道で見られるように、行政や住民団体が音頭をとって、ボランティアによるヨシ刈りが広まりつつあります。筆者も東近江水環境自治協議会という住民団体に属し、ここ数年、ヨシ刈りボランティア運動を展開していますが、滋賀県内だけにとどまらず近隣の他府県からも参加者が多いのはうれしい限りです。

問題は、こうして刈り集められたヨシの用途です。現時点で、最も有望視されているのは、淡海環境保全財団や二、三の民間企業によって開発されたヨシ紙の製造です。今、市場に出回っている紙のほとんどは木材パルプを原料としていて、これが森林破壊、ひいては地球温暖化現象につながっています。この意味で、ヨシなどを利用する非木材紙の普及に大きな関心が寄せられているのですが、残念ながら価格面で木材紙にはとうてい太刀打ちできないのが現状です。紙のほかヨシの腐葉土も開発されており、菊などの栽培に高い評価を得ていますが、これも付加価値という観点からは最適の利用法とは思えません。

パスカルが『パンセ』に遺した至言に、「人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかでもっとも弱いものである。だが、それは考える葦である。」（前田陽一訳）とあるように、今こそ行政・企業・研究者・住民が互いに連携して、英知を出し合い、碧い〈明日の淡海〉を甦らせるために、ヨシの新規活用法の開発に真剣に取り組むべき時であると思います。